

評価語としての「棒読み」の使用実態からみる音声表現の評価次元の検討

工藤倅暖(立命館大学学部生) 岡本雅史(立命館大学)

1. はじめに

「棒読み」という言葉は音声表現を、主に否定的に評価する際に日常的に用いられている。言葉自体は日本語母語話者には直感的に理解されているように見えるが、実際にはその定義は曖昧で、何が「棒読み」とされるかは話者や文脈によって異なる。また、朗読コンテストなどでは審査基準として「自然な表現」がしばしば挙げられ、棒読みはそれに反した「不自然な表現」の一つとされることが多いが、具体的にどのような朗読が自然または不自然かもやはり明確でない。

本研究では、SNSや新聞記事などにおいて「棒読み」という言葉がどのように使用されているかを調査した。そして、前後の文脈や発話主体が棒読みと評価された理由に着目し、棒読みの定義を考察した。その結果、「棒読み」は単に音声的特徴に基づいた評価語ではなく、評価対象の様々な乖離的側面に対する評価者の主観に基づく多次元的な評価語であることが明らかとなった。

2. 関連研究

福田・檜原(2015)は、聞き手が音声を「朗読らしい」と判断する要因を明らかにするため、同一文章をプロが朗読・音読した音声をを用い、大学生に物理的特徴・音声印象を評価させた。その結果、「抑揚がある」「登場人物ごとに声色を変えている」など計4項目が「工夫表現要因」として1因子にまとまり、音声印象では「感情関連因子」「自然さ因子」の2因子が抽出された。朗読らしさを最も強く規定していたのは音声印象ではなく工夫表現要因であり、朗読らしさは感情そのものではなく、感情を表す音声的工夫の集合によって成立すると結論づけられた。一方でこの結果は、朗読らしさ/音読らしさが聞き手による外在的判断であり、必ずしも話し手の意図や内的状態と一致しない可能性を示唆する。

また郡(2014)は、新美南吉の『ごん狐』の同一箇所を複数の熟練朗読者が読んだ音声を分析し、アクセント実現度、文末・文節末の音調、ポーズの使い方に注目した。その結果、熟練朗読では文末に不要な抑揚を加えず、意味的限定関係によってアクセントの弱化・非弱化を使い分けていることが明らかとなった。棒読みの本来の定義である「抑揚をつけず一本調子」という音声は、アクセント弱化・非弱化や読み手のフォーカスと関係すると考えられる。

また、村上(2023)によると、声優の演技が棒読みだと言われる場合、対話相手との「距離感」を誤っていることがその原因であるとされる。これは「棒読み」という評価が、単に音声的特徴に言及したのではなく、聞き手のもつ音声のイメージと実際の音声が乖離している際に棒読みであると判断されている可能性を示唆している。

以上を踏まえ、本研究は、音声評価が音声自体の客観的特徴と評価者による主観的評価の相互作用によって成立する可能性を指摘し、評価語の一つである「棒読み」の実態解明を目的とする。

3. 分析

3.1 分析手順

本研究では、新聞記事やSNS等における「棒読み」という語彙の使用実態を調査し、その文脈から棒読みを構成する要素を明らかにする。

3.2 分析対象

「棒読み」という言葉の日常的な使用実態を調査するため、複数の媒体から「棒読み」を含む記事・投稿を収集した。まず「現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)」(前川・山崎,2014)から書籍32件、Yahoo!知恵袋8件、Yahoo!ブログ16件を集めた。また「朝日新聞デジタル」「毎日新聞デジタル」「産経新聞ニュース」「読売新聞オンライン」の4紙から計144件の「棒読み」を含む記事を収集した。そしてX(旧Twitter)のポストから、2024年1月~12月までの投稿を月毎に約30件分ずつ集め、400件集めたところで収集を打ち切った。そして収集した全データのうち、文脈の判定が不可能なほど極端に

¹ 国立国語研究所(2025)『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(バージョン2021.03, 中納言バージョン2.7.3, 分類語彙表情報 2025.03)
<https://clrd.ninjal.ac.jp/bccwj/> (2025年12月19日確認)

情報の少ないものを182件除外し、総数418件のデータを分析対象とした。

3.3 分析方法

集めたデータを「評価対象」「共起語」「評価極性」の3つの項目で整理した。「評価対象」としては、各記事・投稿から棒読み発話を行っている主体を抽出し、主にその職業的属性に基づいて分類を行った。「共起語」は、「棒読み」の前後の文脈において棒読みに関連する語彙を抽出しまとめた。「評価極性」は、「棒読み」が肯定・中立・否定のどのニュアンスで用いられているかを分類したものである。本研究では、「棒読みであることが評価者にとってどのような影響をもたらしているか」を基準に極性の判断を行った。例えば「あの声優、棒読みで物語の内容が全く入ってこない」という文章があれば、棒読みであることが聞き手の理解を阻害しているというマイナスの効果が生じているため「否定」に分類した。

4. 分析結果と考察

4.1 棒読み発話の主体

評価対象として棒読み発話の主体をカテゴリ化して件数別に整理したものを図1に示す。まず大きな区分として評価対象には、人間以外に少数ながらAIが含まれていた。この点から、現在使用されている「棒読み」という語が人間に限定されない広い対象範囲をもつ評価語であることがわかる。

次に人間の話者について見ると、評価対象はまず「専門話者」と「非専門話者」に大別される。これは音声表現における専門性を基準とし、職務に必要な技術として音声表現の訓練を行っている者を「専門話者」、そうでない者を「非専門話者」として分類した。後者には、「政治家」や「スポーツ選手」など多様な社会的立場の話者が含まれる。また「一般個人」とは特定の職業に分類されない人物を指す。

「非専門話者」に含まれる対象は、発話の機会が多いものの、必ずしも演技や朗読を職能とするわけではない。それにもかかわらず、これらの話者の発話が「棒読み」と形容される例が「専門話者」よりも多く確認された。なお、「登場人物」は実在しない人間の話者についてのカテゴリであり、小説などのフィクション作品内で登場人物がセリフを棒読みで言ったという表記があれば当該カテゴリに分類した。

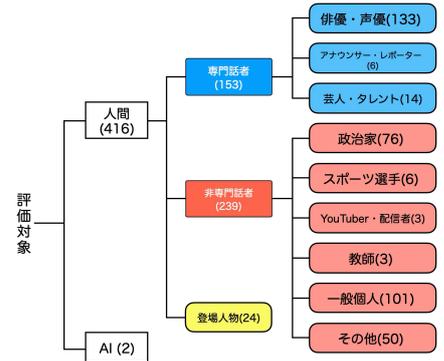


図1. 評価対象のカテゴリ (括弧内は件数)

4.2 共起語

4.2.1 専門話者に対する期待水準：場面の雰囲気との一致

「俳優・声優」「アナウンサー・レポーター」では「平坦」「単調」「淡々」など、音声そのものの平板さを示す語が多く見られたほか、以下のような事例が観察された（なお、以下の全ての事例における下線、太字、(前略)は引用者による）。

- (1) 当初は視覚障害のある人の意見を踏まえ、「せりふと混同されないよう、解説は棒読みにしていました」。だが、場面の明るい雰囲気に合わない解説が「暗くて浮いている」と感じ、次第に情景と合わせて抑揚をつけるようになっていったという。²

これは声優が朝ドラのナレーションを担当したことを伝える記事である。「棒読み」の後文脈から、棒読みの対極に「抑揚をつけた読み方」が置かれていることがわかる。この事例で着目したいのは、後文脈で「場面」「情景」「雰囲気に合わない」「浮いている」という言葉が使用されている点である。これは、評価者（この場合は発話者自身）が「棒読み」に対して、「抑揚がない＝棒読み」、「棒読み＝場面に合わず浮く（不自然）」という連想を行っていることが示唆されている。このことから、音声表現を行う場面の雰囲気と実際の音声を一致させることが専門話者として期待されている水準の一つであることがわかる。実際、「アナウンサー・レポーター」など他の専門話者に関する記事や投稿でも、やはり「下手」「ごちない」など技術的評価に関わる語が多く共起し、話者に付与された役割に対して聞き手が期待する音声表現技術の水準をもとに「棒読み」が用いられていると考えられる。

4.2.2 聞き手が持つ対象へのイメージと音声の乖離

「俳優・声優」など音声表現に関わるカテゴリでは、次のような事例もみられた。

- (2) ガッチャードもそうだけど男女問わず声低くない人が無理に低い声もしくはクールなキャラの口調で話そうとす

² 『朝ドラ「舞いあがれ!」副音声に「小さじ1杯の心情」声優・山崎健太郎がこじませる神業』 <https://www.sankei.com/article/20230207-KCBSE56GC5O5XOJNJ2XEED3QBUI/> (最終閲覧日: 2026年1月5日、以下の脚注も全て同様)

(2)はXに投稿された特撮TVドラマについての感想である。この投稿のように「キャラ」が共起されているものも多くみられ、俳優・声優の演技や声が、演じているキャラクターのイメージと合わないと感じた際に、「棒読み」であるという評価が用いられやすいといえる。この事例においては、声が低いという音声の特徴が、キャラのクールな印象と結び付けられている。そしてそれを演じる俳優・声優の本来の音声の特徴がキャラへの印象と乖離していると判断された際に、棒読みであるという評価につながっていると考えられる。

また、「一般個人」が評価対象になっている投稿においても以下のような投稿がみられた。

- (3) 今日友達と通話したら『元気無いけど大丈夫...?』『え、まじで元気無いよ？感情が無い感じ。何でそんな棒読みなの...?』『ねえ、本当に大丈夫？何かあった?』を連呼されて辛い。自覚無かったけど、私元気無いの...?？だとしたら自分で気づけないってなに⁴

(3)の事例はXから引用したものであり、投稿者が友人と会話した際に、友人から「棒読み」であると評価されたという内容である。前文脈には「元気無い」「感情がない」という共起語がある。この事例も、通話という、声だけが相手の感情表出の情報源になる状況で、音声の特徴から普段の投稿者と様子が異なることを投稿者の友人は指摘したと思われる。(2)と異なる点は、棒読みとされた発話は、発話者本人が自発的に発したものであるということである。このように、自身の言葉であるにもかかわらず、「棒読み」が用いられている投稿も少数存在した。しかし、(3)も(2)と同じように、評価者がもつ棒読み発話者への普段のイメージからその時の音声が乖離していたことにより、「棒読み」という評価が生まれたと考えられる。聞き手のもつキャラまたは人物へのイメージと音声の乖離は、「棒読み」の判断基準に深く関わっている。

4.2.3 態度評価：原稿を介した発話

一方、「首相・政治家」では音声そのものの評価より、「原稿」「答弁書」などの準備された文書の読み上げに関連する語が特に多かった。

- (4) 今国会の論戦で安倍晋三首相の消極姿勢が目立つ。「質問通告がないので答えられない」と言ったり、答弁原稿を延々と棒読みしたり。首相が自身の考えを自身の言葉で語るのを聞きたい。そう思うのは私だけだろうか。⁵

(4)は国会での首相答弁についての記事である。「答弁原稿」が前に共起し、事前に用意することが可能な文章を手元に置いて読むという行為そのものが「棒読み」と結び付けられている。「自身の考え／言葉」が共起していることから、原稿をただ読むだけの行為が「棒読み」とされ、自分の言葉でないことを強調していると考えられる。さらに「棒読み」であることが「上から目線で」「説得力に欠ける」「誠意を感じられない」といった話者の態度と結び付けられているケースが多かった。こうした原稿が介した発話に対する態度評価は、「教師」に対する「教科書」「講義ノート」への言及にも認められる。

4.2.4 主体性の喪失

以下に示す事例は小説の一節であり「登場人物」カテゴリに分類されているが、実在の人間にも当てはまる特徴をもつ。

- (5) (前略) 校内の細かい不審者のピックアップをお願いします』 後半のセリフは棒読みだった。慈吾朗に、そう言えと命じられたに違いない。⁶

この事例では「そう言えと命じられた」という後文脈から、「本人の意思ではなく誰かに言われている」状況であることがわかる。したがって、ここでの「棒読み」は、登場人物が主体性を失い、内心の感情と発話内容が乖離していることを読者に印象付けていると考えられる。

4.3 評価極性

4.3.1 否定的評価

全体的にみるとやはり「棒読み」は否定的な意味で使用されていることがわかる。特に専門話者では「アナウンサー・レポーター」、非専門話者では「政治家」の否定的使用の割合が非常に高く、それぞれ66.7%と78.9%を占めている。以下にその事例を挙げる。

- (6) それがある程度の台風だったとしたら、少しは安全考えて撮影してるんだろうし。ただ単に撮影だけで、レポータ

³ <https://x.com/nana1639ranbo/status/1773685360503001585>

⁴ https://x.com/rito_reality_/status/1749376275695956298

⁵ 『「通告ないと答えられない」目立つ首相の消極姿勢』 <https://mainichi.jp/articles/20181116/k00/00m/010/093000c>

⁶ 響野夏菜 1999 『東京S黄尾探偵団』 東京：集英社コバルト文庫

ーがそれを棒読みだなんて、そんなの何も伝わらないよね。⁷

これはYahoo!知恵袋に投稿された文で、台風の際にレポーターが現地に行って状況を伝えることについて説明している。レポーターが事前に撮影された映像を見て説明するということが、視聴者に台風の状況が伝わらないというマイナスな効果を生んでいるため、この「棒読み」は否定的使用であると考えられる。この背景には、4.2.1節で述べた専門話者に対する期待水準が大きく関わっており、(1)での「場面の雰囲気との一致」以外に「伝達の正確さ」も期待されていることがわかる。

4.3.2 肯定的評価

専門話者である「俳優・声優」のカテゴリでは否定的使用が41.4%と最も多かった一方、肯定的な使用も35.3%と一定数存在した。以下にX投稿の事例を示す。

(7) 「近畿地方のある場所について」が映画化すると聞いたので、聴いてる。(たまたまオーディブルで見つけた)。ただでさえ怖いのに、ナレーターの方がめっちゃ上手くて更に怖い。棒読みの演技がうますぎて……⁸

(7)では、投稿者はホラー小説を読み上げるナレーターが棒読みであると評価している。しかし、これまで示してきた事例とは異なり、演出の一つとしてポジティブな効果をもたらしていると述べられている。ホラー作品における音声表現は物語を感情的に盛り上げるよりも、不穏な状況を淡々と説明し、冷たさ・無機質さを聞き手に感じさせることが重要であると考えられる。そのため、不必要な抑揚や感情表現を除いた棒読みが、聞き手に作品の雰囲気を伝える要素として効果的に働いたと考えられる。非専門話者における棒読みは話者自身の不誠実さや主体性の無さとなげで評価されやすいが、音声表現に関わる専門話者に関しては、話者自身の態度ではなく役柄や世界観との整合性が評価基準となっているといえる。

4.4 まとめと考察

使用実態調査の結果、「棒読み」という評価語は、音声平坦か抑揚がついているかという音声学的な軸だけでなく、発話者や演じられるキャラに対する聞き手の主観的評価と交わりながら使用されている複合的な概念であることが明らかとなった。それは、専門話者への技術的な期待や一般個人の普段のイメージ、さらには演じられるキャラや場面の印象、といった多次元的な要因に対する聞き手の主観的評価値から、実際に表出された音声乖離していることが棒読み判定の背景となっていることを示唆している。

こうした評価軸の多次元性は、音声学的評価次元と直交する、「乖離／一致」という大きな評価次元としてまとめることが可能であると本稿では主張する(図2)。つまり、専門話者による棒読みは、求められる期待水準、演じる場面の雰囲気やキャラなどと乖離した場合に指摘され、非専門話者においては、話者の主体性や真の感情、あるべき態度などの乖離が棒読み評価に繋がっていると考えられるのである。

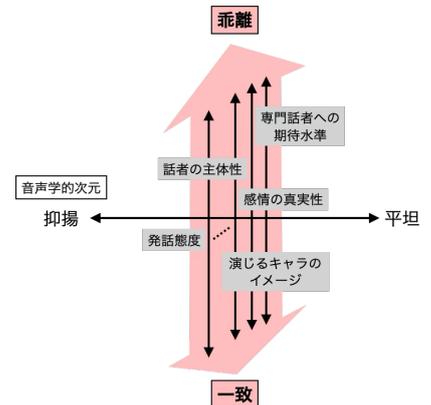


図2. 音声表現の評価次元モデル

5. おわりに

今回は「棒読み」を含む文脈を集め、手作業で共起語を抽出し極性の判断を行ったが、抽出・分類基準が曖昧である部分が多いため、対照分析などのより説得力のある統計的手法で検証する必要がある。また、Goffman(1981)の産出フォーマットと「棒読み」の評価次元との関わりを明確化することも今後の検討課題である。しかしながら、「棒読み」を扱った研究は未だに少ないため、本研究を端緒として「棒読み」の研究が進み、音声表現研究がさらに進展することを期待する。

謝辞 本研究はJSPS 科研費 25K21855, 23K00522 の助成を受けたものです。本稿の執筆にあたって、ご助言をいただいた千葉大学の伝康晴先生、東京工科大学の榎本美香先生、ならびにUBゼミとEDOゼミの皆様にご心より感謝いたします。

参考文献

- 福田由紀・榎原拓真 (2015). 何が朗読らしく思わせるのか? 法政大学文学部紀要, 71, 125-134.
Goffman, E. (1981). *Forms of Talk*. PH: University of Pennsylvania Press.
郡史郎 (2014). 物語の朗読におけるイントネーションとポーズ: 『ごん狐』の6種の朗読における実態 言語文化研究, 40, 257-279.
前川喜久雄(監修)・山崎誠(編)(2014). 書き言葉コーパス—設計と構築— 講座日本語コーパス2 朝倉書店
村上遥 (2023). 対話時の物理的距離を人は話声から聞き分けられるのか?: 演劇界で知られる「距離感」の存在実証に向けた取り組み 人工知能学会全国大会論文集, 206 OS-2b-02, 1-3.

⁷ https://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q125783342

⁸ https://x.com/iyokan_manger/status/1871175904808128549